

〔今昔物語 二十七〕白井君銀提入井被取語第二十七

其ノ房ニ井ヲ堀ケルニ、土ヲ投上タリケル音ノ石ニ障テ、金ノ様ニ聞エケルヲ聞付テ、白井ノ君此レヲ恠ムデ寄テ見ケレバ、銀ノ鏡ニテ有ケルヲ取テ置テケリ、

〔續日本紀 元正〕養老六年十一月丙戌詔曰、略 中 太上天皇明 元 奄奇稟 誤 普天略 中 故奉爲太上天

皇略 中 造略 銅鏡器一百六十八略 下

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合白銅飯鏡玖口 佛分參口 一口徑四寸三分、深二寸三分、略 口徑六寸、深二寸七分、一口

徑六寸五分、深三寸 藥師佛分壹口 深三寸、 觀世音菩薩分壹口 深二寸、 塔分參口

口徑各五寸六分、 通分壹口 口徑六寸四分、 深二寸三分、 深三寸、

合白銅鏡伍拾捌口略 下

〔東大寺正倉院御寶庫御開封記錄〕御寶物目錄 一青銅碗 二百七十四

〔日本書紀 神代二〕時彥火火出見尊、就其樹下、徒倚彷徨、良久有一美人、排闥而出、遂以玉鏡來當汲水、因

舉目視之、

〔晉書 五十八 周訪傳〕王敦略 中 遺玉環玉碗以申厚意、訪投碗於地曰、吾豈賈豎、可以寶悅乎、

〔古事記 上〕爾海神之女、豐玉毘賣之從婢、持玉器將酌水之時、於井有光、仰見者有麗壯夫、略 註 以爲甚

異奇、爾火遠理命、見其婢、乞欲得水、婢乃酌水入玉器、貢進、爾不飲水、解御頸之璣、含口唾入其玉器、

〔古事記 傳 十七〕さて後世には、井より水を汲揚るには、必繩など著たる都流倍を用ふる事なれ

ども、略 註 上代の井は、淺き泉なるなども多かりしかば、今は山里など、盛器を以て直に汲揚も

まつとおぼしければ、此の玉器も盛器以て、汲にてもあるべく、又汲たるを盛る料にても有べ

し、次の文に、酌水入玉器貢進とあれば、汲揚るのみの料の器には非ず、